

伊雑宮の復活が意味するところ

(1)

飛鳥昭雄氏と三神たける氏による『失われたキリストの聖十字架「心御柱」の謎』（学研、297 ページより）には興味深い情報が記されている。

伊雑宮は、伊勢神宮の 10 社ある別宮の一つと考えられてきたが、実は本当の価値を隠されてきたらしい。

1679 年、江戸において『旧事本紀大成経』なる書物が刊行された。伊雑宮の神庫から出てきた秘伝であるとして、当時のインテリを中心に僧の潮音、長野采女、広田丹斎などが喧伝し、爆発的に広がったという。

この題名に含まれる『旧事本紀』は、一説によると聖徳太子が蘇我馬子に編纂させたものである。内容は、『古事記』や『日本書紀』に含まれなかった同時代の情報が記されているため、中世においては、記紀と並んで神道の根本神典『三部の神経』のひとつと考えられてきた。

だが、江戸時代になって儒学者の林羅山が『旧事本紀』を偽書としたため、評価は一転失墜した。徳川家綱も焚書を命じ、この世から抹殺された。

そのような中、1670 年に『旧事本紀大成経』31 巻本が刊行され、続いて先の『旧事本紀大成経』72 巻本が世に出る。

内容は一貫して、「物部氏」の正当性が記されている。

伊雑宮のもっとも古い神官の家族的矢氏が物部氏であるためであるかもしれないが、世間の注目を集めたのは、伊勢神宮に関する記述であった。

曰く、「本当の伊勢神宮は伊雑宮である」。

これは、本家の伊勢神宮の猛反発を招いたという。

伊雑宮という分家が、本家に対して「本当の本家は自分だ」というわけだから、争いを巻き起こすのも当然だった。

しまいには朝廷も乗り出す事態になった。結果、『旧事本紀大成経』は偽書であるということで一件落着となった。

今でもかつてのような記紀に匹敵する根本神典とみなされていない。

しかし、飛鳥氏と会った八咫鳥のリーダー大鳥は、伊雑宮が内宮と外宮に匹敵する第 3 の伊勢神宮であると断言した。

つまり、『旧事本紀大成経』の主張と一致するのだ。

これは、何を意味するのか。

藤原氏による物部氏の封印と関係している。

事実上記紀を編纂した藤原不比等が、何らかの目的で伊雑宮を隠し、伊勢神宮を内宮と外宮の二宮にした。

飛鳥氏と八咫鳥の会話がある。

「なぜ伊雑宮を本宮からはずし、別宮のひとつとして世間から隠したのですか」

「貴殿はどう思う」

「それは・・・」

・・・

「伊雑宮が隠された理由、それは奥義だからです」

「貴殿のいう奥義とは、祭神のことか」

「はい」

「伊勢神宮の本当の祭神は造化三神だが、それは隠されておらん。記紀に、ちゃんと記されておる」

「ならば、奥義は伊雑宮そのもの。伊勢神宮が三宮から成り立っていることを隠すために、伊雑宮を封印しました」

「・・・」(303-304 ページ)

以上の箇所を読んで私には思い当たるふしがあった。

1995年に伊勢神宮を訪れた際に、内宮と外宮を結ぶ参道に立っている灯籠にユダヤの六芒星がついているのを見た。

後で調べると、伊勢神宮曰く、それはユダヤではなく「伊雑宮」の社紋であるという。

どうして伊雑宮の社紋がここにあたかも「忘れるなよ」と言わんばかりになぜ付けられているのか。

既述のとおり、伊雑宮は10宮ある別宮の一つである。それなのに、なぜこのような格別の扱いを受けるのか。

理由は、伊勢神宮の第三の宮だからだ。

もともと伊勢神宮は、3つの宮から成り立っていたのだ。

外宮と内宮の心御柱が正中から西北・東南に外れているのは、伊雑宮を指し示すためだという。(304ページ)

では、なぜ藤原不比等は伊雑宮を隠したのだろうか。

それは、おそらく物部氏を消すためだろう。

八咫鳥によると、物部氏は、徐福の子孫。徐福は、ユダヤ出身といわれる秦の始皇帝の血族で、イスラエル12支族のヨセフ族。

ユダヤ色そしてキリスト色を消すために、藤原氏は、伊雑宮を隠したのでは。

友人の川口氏は、1988年にたまたま訪れた籠神社の別宮真名井神社でユダヤのマークを発見した。

彼はそのとき、自分の先祖が建てたこの神社がユダヤであるならば、自分もユダヤ人に違いないと悟った。

同行の日蓮宗のお母さんも、それを悟り、クリスチャンになった。

後に、籠神社の宮司海部氏は、自分の氏族は物部の中心であり、籠神社も真名井神社も物部だと言った。

籠神社と、伊勢神宮の内宮と外宮、そして、伊雑宮を結ぶとまっすぐの直線になる。

そして、籠神社にダビデの星があり、伊雑宮にもダビデの星がある。

八咫鳥によると、この両方の神社は、阿吽だという。

阿吽とは、アルファとオメガ、つまりイエス・キリスト。

さらに、伊勢神宮のご神体の最初の上陸地点が籠神社だとも。

伊勢神宮のご神体は、籠神社から長い年月をかけて伊勢神宮にたどり着いた。

そして、最初にそのご神体があった場所は、伊雑宮であったという。

そのご神体とは、十字架だった。

十字架は、伊雑宮にあったのだが、その後、内宮に移された。

現在は、十字架の上についた罪状書きだけがある。これを八咫鳥は「首」と呼んだ。そして、この首こそが、十字架よりも重要なご神体であるとも。

籠神社は物部、そして、伊雑宮も物部。伊勢神宮のご神体の移動は、すなわち、物部の移動でもあった。つまり、実は、日本の中心神社伊勢神宮は物部の神社。

藤原氏は、それを隠したかった。

私は、藤原氏が「蘇我氏は廃仏派の物部氏を滅ぼした仏教派で、悪党である」との印象を与えたと推定する。

そして、日本書紀において、「自分こそはその悪党を大化の改新のクーデターで滅ぼした英雄である」と描こうとしたのではないか。

すなわち、自分こそ真の神道派、天皇家の神社伊勢神宮の支持者であると。自らの政権の

正当性を示すためにこのような細工をしたのではないかと考える。

その場合、伊雑宮が真の伊勢神宮の第3宮であることがばれると自説にはころびが出る。

そこで必死に隠したのだが、物部氏は正中はずし、そして、灯籠の六芒星において真理を暗示した。

いろいろと情報を集め、論証の必要があるが、私は、日本の原宗教はユダヤ系キリスト教だと考えている。

その事実が、百済の王族を先祖に持つ藤原氏によって巧妙に隠されてきたと推察する。

(2)

大和王朝前に、ニギハヤヒ王朝があった。これは、物部氏の王国であり、それゆえユダヤ性、キリスト性が強かったのであろう。私の現在の推察では、おそらく蘇我氏と秦氏は、この王朝との間に密接な関係があった。だから、物部氏とこの2つの氏族は共通の信仰を持っていたのだろう。

しかし、藤原氏が政治の実権を握り、歴史を改ざんした結果、物部氏は蘇我氏によって滅ぼされたとされ、蘇我氏はその滅亡の張本人とされ、秦氏とともに追放された。

中世において「物部氏の古事記」である『旧事本紀』は、記紀に並ぶ神典とみなされていたが、江戸時代になって偽書として葬りさらされた。まだ物部氏が復活できる時代ではなかったのだろう。

既述のとおり、『旧事本紀』は、聖徳太子が蘇我馬子に編纂させたものであるとの説があるという。この説が正しいとすると、従来の藤原史観から見て、非常に奇妙である。

物部氏を迫害した蘇我氏がどうして物部氏の正当性を証明する本を編纂するだろうか。

やはりどこかに歴史の改ざんがあったのだ。蘇我氏と物部氏を分断しようとの意図があったに違いない。

物部氏のニギハヤヒ王朝がユダヤ性を濃厚に残していて、紀元前から日本の中心勢力はユ

ダヤ的であった。

そして、おそらく西方のキリスト教文化圏からシルクロードを通過して来日した新羅系の蘇我氏と秦氏が、新約の民として日本に入り、旧約の民物部氏と同一の信仰者として習合し、大和朝廷成立後も、日本の有力統治集団として天皇家とともに存在していたのであろう。大化の改新まで。

藤原氏は、これらの集団から政治の実権を奪うために、自らが行った物部氏の暗殺を巧みな操作により蘇我氏が行ったと見せかけ、同時に秦氏をも巻き込んで、自らを天皇家の下に統治者として君臨する体制を築き上げたのではないか。

その政権の正当性を示すため、旧事本紀を葬り去り、その代わりに古事記と日本書紀を編纂した。

だから、記紀は、藤原氏によって色づけされ、改ざんされた古代の情報なのだろう。そのような歪曲があっても、やはり昔の記憶は残されている。

下記のサイトでは、聖書と古事記の関係が詳しく扱われている。

<http://kojiki.imawamukashi.com/index.html>

(残念ながら、他の日猶同祖論者と同様に、プレ・ミレの立場であり、黙示録を非プレテリズム的に読んでいる)

かかる流れを見ても分かるように、我々が、原日本の宗教を解明し、回復するためには、旧事本紀は重要な文献であり、ニギハヤヒ王朝、物部王国について調べることはきわめて重要である。

(3)

日本とはどのような国なのか。これは長い間なぞであった。

しかし、神は今、我々にそれを教えようとしておられる。

日本は、もともとユダヤ系キリスト教の国であった。ユダヤ系キリスト教国は、日本以外に存在しない。

なぜならば、紀元 70 年以降、福音は異邦人に伝わったからだ。

今我々がキリスト教と呼んでいる「ステンドグラスの教会」をシンボルにしたキリスト教とは、実は、本来のキリスト教とは異質の欧米化されたキリスト教、異邦人化されたキリスト教である。

このキリスト教は、異邦人の手によって発展したために大きな欠陥がある。その欠陥とは、「自然崇拜」である。

聖書が「無からの創造」を唱えるのに対して、欧米のキリスト教は、「創造の前に自然があった」と考える。

だから、聖書の「創造の法＝聖書法」よりも「自然法」のほうが尊重される。

欧米のキリスト教の歴史とは、「聖書法」と「自然法」の強調の度合いの変動の歴史である。

ローマ・カトリックであっても、初期のころは、それほど自然法強調はひどくなかった。

ひどくなったのは、トマス・アキナスが、キリスト教を「ギリシア思想」によって再編してからだ。

それ以降、ローマ・カトリックは墮落する。そして、宗教改革に至る。

宗教改革において、改革者たちは、「聖書に帰れ」と訴えた。

カルヴァンにおいて体系化された宗教改革神学の基本は、「聖書法」の強調である。

それでも、再建主義と比較すれば、まだまだ足りなかった。

自然法、自然啓示、自然理性に対する信頼は、デカルト及びカントにおいて復活した。

ここにおいて、西欧は、「世俗化への土台」が形成され、この土台に基づいて次第に聖書法の軽視が加速していった。

今の時代は、それが頂点に達した時代である。

同時に、神は、ヴァン・ティル及び再建主義を通じて、聖書法を回復され、「聖書法は万物

に対する最高権威である」との徹底した聖書法信仰が確立された。

つまり、現代とは、麦と毒麦がはっきり分かれた時代なのだ。

それまであいまいであったものが、はっきりと識別できるようになった。

さあ、どちらにつくか、それによって、その人が神の陣営に属する人か、それとも悪魔の陣営に属する人かが分かる。

聖書啓示、聖書法、聖書の教えを、自然啓示、自然法、科学よりも上位におくか、それとも、その逆か。

ユダヤ人は、旧約時代、様々な裁きと訓練を経験する中で、聖書法を何よりも尊重することを学んだ。

同時に、紀元 70 年前には、聖書法を捨てて、武力中心、人間理性中心のユダヤ人もはっきりとその姿を表すようになった。

今の時代は、紀元 70 年の裁きと平行した時代だ。

つまり、紀元 70 年が、ユダヤ人の時代の終末であり、今の時代は、異邦人の時代の終末である。

神は、アブラハムからキリストまで二千年間ユダヤ人に恵みを賜り、ユダヤ人を救われた。

彼らは、恵みを拒んでついに反逆は頂点に達し、紀元 70 年に、大淫婦として裁かれた。

キリストから現代まで二千年間、神は異邦人に恵みを賜り、福音を与えてこられた。

異邦人は、恵みを拒んでついに反逆は頂点に達しようとしている。もしかして紀元 2070 年に「異邦人の時代の終末」が訪れるのかもしれない。

神の御計画は人間にとって不明なので、年代を決定するのはやめよう。

しかし、ユダヤ人の時代 2000 年、異邦人の時代 2000 年で平等という図式は適切ではないかと思う。

聖書によれば、最終的に異邦人の時代の終わりに、ユダヤ人が回復するので(ローマ 11 章)、今後ユダヤ人がクリスチャンになるだろう。

いや、実際に全世界でユダヤ人の回復は起こりつつある。

ユダヤ人が回復するとどうなるだろうか。

では、尋ねましょう。彼らがつまずいたのは倒れるためなのでしょうか。絶対にそんなことはありません。かえって、彼らの違反によって、救いが異邦人に及んだのです。それは、イスラエルにねたみを起こさせるためです。もし彼らの違反が世界の富となり、彼らの失敗が異邦人の富となるのなら、彼らの完成は、それ以上の、どんなにかすばらしいものを、もたらすことでしょう。

そこで、異邦人の方々に言いますが、私は異邦人の使徒ですから、自分の務めを重んじています。

そして、それによって何とか私の同国人にねたみを引き起こさせて、その中の幾人でも救おうと願っているのです。

もし彼らの捨てられることが<世界の>和解であるとしたら、彼らの受け入れられることは、死者の中から<生き返ること>でなくて何でしょう。(ローマ 11・15)

ユダヤ人の回復は、「世界の復活」である。

ユダヤ人が回復するとき、世界はよみがえる。

黄金の千年紀が始まる。

日本は、もともとユダヤ文化であった。

紀元前においてバビロン捕囚を逃れた人々がまとまって日本列島に入った。

日本は「逃れの島」だったのだろう。

紀元 70 年に、ユダヤ人への裁きから救われたクリスチャンたちも、日本に渡ってきた。

世界には、日本を理想の国とする伝説がある。

<http://homepage3.nifty.com/time-trek/else-net/topics-07-01-10.html>

<http://tak0719.web.infoseek.co.jp/qanda3/74f0vWDb5lmjo69402.htm>

東の果ての島国はおそらく大陸の戦乱を逃れてきた人々の救いの島であったのだろう。

不老長寿の薬を求めて数千人の若い男女を伴ってやってきた徐福は、実はユダヤ王国を建設しようとしてきた。

彼らは、物部氏となって、ニギハヤヒ王朝を作り、日本を統治していた。

後に、天皇家がやってきて、大和朝廷が開かれてからも、物部氏は、天皇家を支える役割を果たした。

その後、シルクロードを通じて秦氏や蘇我氏がやってきて、物部氏と合流し、ユダヤ文化による日本統治が行われていた。

しかし、紀元 7 世紀に革命が勃発。天皇を支える人々が追い出され、代わりに百済系の藤原氏が統治者となり、今日まで続いてきた。

この 1400 年の間、ユダヤ色は表から消された。秦氏や蘇我氏、物部氏は、地下にもぐった。

伊勢神宮は、「絶対に見てはならない」ご神体の数々においてユダヤ性を継承してきた。

しかし、真のキリスト教、つまり、ユダヤ系キリスト教の継承者であるところの日本人が、回復しようとしている。

そのルーツが次第に明らかになりつつある。

これは、ユダヤ人の回復のもう一つの現象である。

世界に散った紀元 70 年に「滅んだユダヤ人たち」が回復すると同時に、「救われたユダヤ人」である日本人も回復しようとしている。

異邦人の時代が終わりに近づきつつあるのと同時に、ユダヤ人の回復も起こりつつある。

日本人は、本家のキリスト教徒である。こちらが元祖である。

本家のキリスト教が回復したらどんなことが起きるだろうか。

文字通り世界は復活する。

サタンは文字通り縛られる。

驚くべき時代が到来するだろう。

<http://www.ne.jp/asahi/davinci/code/history/hadano/index6.html>